

エクトール・マロ原作, 五来素川訳『家庭小説 未だ見ぬ親』の研究

渡 辺 貴規子

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生文明学専攻

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 『家なき子』の邦題で有名なフランス児童文学作品, エクトール・マロ原作 *Sans Famille* (1878) は, 五来素川が『未だ見ぬ親』の題で初めて翻訳し, 明治36年に出版された。 *Sans Famille* はどのような価値を見出され, 付加されて日本に紹介されたのか, 本稿ではこの問いについて, この作品が「家庭小説」とされたことを手がかりとし, また原作と翻訳の比較, 他の五来素川文章の読解を通して検討する。

五来素川は道徳を含む小説で読者を教化しようとし, 『未だ見ぬ親』には日本の「家庭」で基準とされるべき家族の道徳, 特に親子道徳が含まれたと考えられる。原作に見出されたのは個人主義に基づく親子関係であり, 親子間の情愛と子の人格形成を目指す教育が評価された。その一方で『未だ見ぬ親』には, 五来素川が日本の家族主義の道徳の基礎と見なした, 子から親への報恩の観念も付加された。五来素川は当時の日本の社会を家族主義から個人主義の過渡期にあると理解しており, 『未だ見ぬ親』には, 個人主義を基本としつつ, 当時の日本の「家庭」にふさわしい親子道徳が込められたと言える。

序 論

『家なき子』の邦題で知られるフランス児童文学作品, エクトール・マロ (Hector Malot, 1830-1907) 原作 *Sans Famille* (1878) は, 五来素川により『未だ見ぬ親』¹⁾の題で初めて日本に翻訳, 紹介された。明治35年3月1日から7月13日まで『読売新聞』に全94回にわたり連載され²⁾, 明治36年7月に警醒社, 東文館, 福音新報社から単行本が出版された『未だ見ぬ親』は³⁾, 新聞連載中から「家庭小説」の角書が付された。 *Sans Famille* は翻訳者にどのような価値を見出され, また付与されて日本に紹介されたのか, 本稿ではこの問いについて, 『未だ見ぬ親』が「家庭小説」として紹介されたことを手がかりとし, また, 原作の *Sans Famille* と単行本版『未だ見ぬ親』の比較, 五来素川が執筆した論文や論説などの読解を通して検討したい。

『未だ見ぬ親』に関する先行研究は極めて少なく, 管見の限りでは, いくつかの論文の中で言及がなされるだけである。佐藤宗子は, 大正時代以降の『家なき子』の再話研究の中で, 『未だ見ぬ親』が楠山正雄による完訳『少年ルミと母親』(昭和6年)の契機となったことなど, 『家なき子』の再話に対する『未だ見ぬ親』の影響に言及しながらも, 『未だ見ぬ親』の作品自体に関しては再話の構造, 物語の切り取り方の問題, 物語の日本化の一過程に言及するにとどまる⁴⁾。キリスト教児童文学史研究では, 沖野岩三郎が, 『福音新報』が『未だ見ぬ親』を「基督教児童文学の三大訳書」の一つとした見方を紹介する⁵⁾。また鳥越信は, 『未だ見ぬ親』が明治以降の「封建的な制度にたいする改革の動き」の中で「新しい家庭観・児童観の確立」を主題とした翻訳児童文学作品の一つであると述べた⁶⁾。近代日本文学の「家庭小説」に関する先行研究からは『未だ見ぬ親』

は度外視され、管見の限りでは、飯田祐子が唯一「家庭小説の角書を持つ別の系統の作品群」として『未だ見ぬ親』に言及しており、飯田による位置づけの根拠とされた日夏耿之介の論では、「基督教的家庭文学」として『未だ見ぬ親』は『不如帰』『金色夜叉』などと別に論じられる⁷⁾。

本研究は、そもそもなぜ *Sans Famille* が日本で紹介されるにいたったか、源から知りたいという考えに端を発している。この問いについて、五来素川の経歴や思想、そして『未だ見ぬ親』の内容に踏み込んで検討されたことは今まで全くなかったと言ってよい。

本稿の構成は以下の通りである。第1章では、五来素川の経歴を整理し *Sans Famille* が日本に紹介された経緯を推定するとともに、翻訳に際し使用された原書の版を特定する。第2章において「家庭小説」の特徴を整理し、『未だ見ぬ親』はこれからの「家庭」において基準とされるべき親子道徳を説く小説であると考えられる点について論じる。第3章、第4章では、原文と翻訳文の比較、他の五来素川文章の読解を通し、原書に見出され、また翻訳に付加された親子道徳とは何かを論じる。

1. 『未だ見ぬ親』に関する基本事項

1-1. *Sans Famille* が日本で紹介された経緯

まず、『未だ見ぬ親』の翻訳者である五来素川の経歴について、明治37年からのヨーロッパ留学以前を中心に整理し、*Sans Famille* が日本に紹介された経緯について推定したい。

五来欣造（筆名：素川、1875-1944）は、明治8年6月に茨城県の士族の家に生まれた⁸⁾。明治23年春に上京し東京英語学校で学んだ後⁹⁾、翌年8月に第一高等中学校フランス語予科三級に入学、明治29年第一高等学校文科フランス文学科を卒業した¹⁰⁾。明治30年8月東京帝国大学法科大学仏法学科に入学し、明治33年7月に同学科を卒業¹¹⁾、卒業後は個人で弁護士事務所を開業する傍ら¹²⁾、読売新聞に明治35年3月1日付で入社した¹³⁾。「家庭小説 まだ見ぬ親」の連載は五来にとって社員として最初の仕事となる。連載終了後、読売新聞紙上では「感情の教育」（明治35年

9月13-14日）、「青年立志の方針」（同10月8日）、「教育界の覚醒——個人主義の主張」（同11月1-14日）等の複数の論説を第一面に執筆した。とりわけ、斬馬劍禅の名で連載した「東西両京の大学」（明治36年2月25日-8月7日）では東京帝国大学と京都帝国大学の法科大学教育を比較し、個々の教授の講義や教育態度を名指しで批判して当時の「読書界を震撼せしめ」¹⁴⁾たと評価される。宗教面では、青年時代からプロテスタント信仰者で、植村正久が牧師であった一番町教会において帝大在学中に受洗し、明治34年には同教会の「青年伝道隊」に加わる¹⁵⁾。単行本版『未だ見ぬ親』の献辞は、植村正久の次女と三女、植村恵子と植村環に宛てられている。明治37年に読売新聞社主本野一郎の斡旋で、読売新聞特派員兼東洋語学校日本語教師としてパリに渡り、その後ベルリン大学で政治学を研究する。帰国後の大正3年には読売新聞主筆を務め、翌年の読売新聞退社後、大正8年に早稲田大学政治学部の教授となつて『儒教のドイツ政治思想に及ぼせる影響』（昭和4年）で政治学博士号を取得した。雑誌『大観』の創刊（大正7年）に携わり、『国民新聞』の主席論説委員を務めるなど、ジャーナリストとしても積極的に活動した¹⁶⁾。

五来は明治37年に初めて渡欧したのであるから、*Sans Famille* の原書は誰かの手を介して日本で入手したと考えられる。単行本版『未だ見ぬ親』の「小引」には、本作品が日本に紹介された経緯を示す可能性のある一文が見出せる。つまり、「東京帝国大学法科大学講師瑞西人ブリデル氏、嘗て此書を其家庭に於て衆児の為に朗読せしことあり、其將に結了して巻を掩はんとするや、氏の末子（当年八歳）は叫んで曰く、『父君願くは児の為に再び之を読め』（Il faut recommencer）と、以て如何に此書が欧州の社会に歓迎せられたるかを知るに足る」¹⁷⁾という一文である。

「ブリデル氏」とは、明治33年から大正2年まで、東京帝国大学法科大学仏法学科で「仏蘭西法」を講義していたルイ・アドルフ・ブリデル（Louis Adolphe Bridel, 1852-1913）である。ジュネーブ大学法科大学教授であったブリデルは、東京帝国大学教授富井政彰の推薦により東京帝国大

学フランス法教師として招聘され、明治33年10月16日に来日して以来、仏法学科の全学年の学生を対象に「仏蘭西法」を講じた¹⁸⁾。五来は明治33年7月に帝大を卒業し、ブリデルの講義を直接には聴いていないが、先述した「東西両京の大学」からは五来が卒業後も帝大内に多くの人脈を維持したことがうかがわれ、卒業生としてブリデルと出会ったと思われる。ブリデルが五来に原作を紹介した直接の証拠はないが、「小引」にその名が挙げられている点、ブリデルの来日と読売新聞紙上での連載開始が時期的に近い点から、ブリデルが五来に *Sans Famille* を紹介した可能性は高いと考えられる。

1-2. 翻訳に際して使用された原書の版について

一高在学中からフランス語を第一外国語として学び、高いフランス語能力を有した五来は、*Sans Famille* をフランス語の原書から直接日本語へ翻訳した。『未だ見ぬ親』の「小引」では原書の説明がなされ、「上下両巻よ成り、合計九百頁に近き浩瀚のもの」であり、「出版以来未だ数年ならずして既に百五十版を重ね」と記述される¹⁹⁾。

「家庭小説 まだ見ぬ親」が読売新聞紙上で連載される明治35年3月までにフランスで出版された *Sans Famille* の版は、Dentu 版 (1878 年初版)、Hetzel 版 (1879-1880 年初版)、Charpentier 版 (1888 年頃初版)、Flammarion 版 (1896 年初版) の四種類である²⁰⁾。各版の原文と単行本版『未だ見ぬ親』の翻訳文とを比較した結果、翻訳の底本として使用された原書の版は Dentu 版と Charpentier 版の両方であると考えられる。特定には各版のヴァリエントを利用した。まず、Hetzel 版、Flammarion 版で削除され、Dentu 版、Charpentier 版に存在する箇所が『未だ見ぬ親』の中で訳出されるので²¹⁾、後者の二種類の版が底本とされていると言える。Dentu 版と Charpentier 版の間には、他の二種類と比較してヴァリエントの数が少ないが、次の引用に示す箇所の翻訳によって両方の版が参照されていると判断した。

Me sauver, je sentais que c'était maintenant impossible et que par suite il était inutile de le tenter. (D, I, pp. 55-56)

Me sauver! Je n'y pensais plus. Où aller d'ailleurs? Chez qui? (Ch, I, p. 54)

逃げ出さうとて今更及び難い事である、亦逃げ果せればとて何処おほの誰れの所に行かう (54 頁)

「逃げ出さうとて今更及び難い事である」という前半部は Dentu 版が参照され、「亦逃げ果せればとて何処の誰れの所に行かう」という後半部は Charpentier 版が参照されている。先述した原書に関する五来の記述にも、この二版はほぼ合致する。Dentu 版、Charpentier 版ともに二巻本で、合計頁数はそれぞれ 765 頁、781 頁であり、頁数に関しては少し大袈裟に述べられている。また、Charpentier 版は初版が 1888 年頃出版され、1893 年に 112 版を重ねているため (註冒頭を参照)、五来が原書を入手した時点で 150 版以上重ねられている可能性は高い。『未だ見ぬ親』の翻訳は Dentu 版と Charpentier 版の両方を相補完するように参照して完成されたと考えられ、本研究における原書と翻訳の構成及び文章の比較もこの二版を基に行った。

2. 「家庭小説」としての『未だ見ぬ親』

2-1. 「家庭小説」の特徴と五来素川の小説観

『未だ見ぬ親』は読売新聞紙上での連載開始の時点から「家庭小説」と角書が付されて紹介された。「家庭小説」は明治30年代を中心に流行したジャンルで、「家庭の団欒にあって読まれるにふさわしい読物」²²⁾とされる。「家庭小説」の特徴に関し本稿では以下の二点に整理する。第一に「家庭小説」が「健全な道徳」に基づき読者を教化すると期待された点、第二に小説の受容の場として「家庭」が想定された点である。

加藤武雄は「家庭小説」を定義づける特徴として、常識的な意味において道徳を持ち健全である

点、情緒的である点、悲惨な事実があっても最後は道徳の勝利となる点の三点を挙げる²³⁾。先行研究によると、「家庭小説」はその概念が登場した時から道徳と結び付けられている。金子明雄、飯田祐子によると、「家庭小説」という概念は、明治29年12月の『帝国文学』の記事「家庭と文学」において初めて現れ、その後同誌の「雑報」欄を中心に家庭小説待望論が展開される。そこでは「家庭の趣味を高め、家庭の和気を図る」²⁴⁾小説が提唱され、小説に表される「健全な道徳」が読者の思想を「高尚」にする役割を果たすと期待された²⁵⁾。家庭小説待望論は教育界からも出現した。明治32年全国高等女学校校長会議での「女学生の小説読書を禁止する案」の決議をはじめ、明治30年代前半に社会問題化した学生風紀問題に関する議論の中では、青少年に対する小説の悪影響が批判を受け、教育に有用な道徳的効用を持つ小説が求められた。「家庭小説」の登場はこの議論と時期を同じくし、教育界の要請にも応えるものであったと言える²⁶⁾。

教育的な小説が受容される場として想定されたのは「家庭」であった。明治20年代に「ホーム」の訳語とされた「家庭」は、先祖崇拜、家産・家名の維持、家父長権、封建的道徳思想に基づく従来の家族ではなく、自立した個人と夫婦関係の元に成立する新しい家族を示した²⁷⁾。「家庭」についてのこれまでの研究によると、「家庭」が示す新しい家族の特徴として、近代的な性的役割分業が成立する点、家族成員と非家族成員の境界が明確化し「一家団欒」が追究すべき価値となる点、子どもが愛護と教育の対象と見なされる点が挙げられ、情緒的結合を重視する「家庭」型の家族が国家の基盤と見なされた一面もあった²⁸⁾。牟田和恵によると、明治20年代末からこのような「家庭」に関する言説が噴出し、「家庭小説」は、中産階級以上の人々ばかりでなく、より下の社会階層の人々に対しても、「家庭」のコンセプトを普及・浸透させる役割を果たす。その言説の中の「家庭」の第一のイメージは道徳の守護者というもので、俗悪から守られ無垢であるべき「家庭」にふさわしい「清浄」な読物としての「家庭小説」が求められたのである²⁹⁾。

五来素川は、以上のような「家庭小説」の特徴を意識した上で『未だ見ぬ親』を翻訳し、「家庭小説」として紹介したと考えられる。五来は自らの小説観を、明治35年9月13日、14日の読売新聞論説「感情の教育」³⁰⁾の中で表している。その中では、小説が「無用有害のものとして社会に排斥せられ」ており、「厳格なる家庭に於てハ、絶対的に子女に小説の閲読を禁ずる」当時の状況を変えるためには、読者の教育に資する「高潔なる著作」を文学者が自覚的に書かねばならないと述べられる。さらに五来は、小説が貢献できるのは読者の「感情」の教育に対してであると主張する。

感情ハ人の品性を作る、高潔なる情趣ハ人格を高尚にし、下劣なる情念ハ品性を野卑にす、〔……〕感情の高下ハ個人の品性に關し、延いてハ社会の品格と幸福とに關す、〔……〕高潔なる情念を發達せしむる所以ハ、是れ社会の品位を高らしむる所以なり、〔……〕現今の学校教育なるものハ、全く知的の一方にのみ偏して、少しも感情の教育に注意せざるが如し、〔……〕唯現今僅に此欠点を補ひ得べきもの、一方に於て宗教あり、一方に於て文学あるのみ³¹⁾

五来は、小説が読者個人の「感情」の教育に役立ち、その「人格を高尚に」することは、社会の教育にもつながると考えている。このような五来の小説観は、単行本版『未だ見ぬ親』の「小引」にも表されている。「小引」の中で五来は、「情趣の纖麗純潔、趣味の清新高雅を以て仏国文学界の一大名作たる」*Sans Famille*を「読者に紹介せんと欲し」たこと、「此種の純潔なる読物に欠乏せる我読書界に紹介し、以て社会教育の一端に資する」のを期待したことを述べる³²⁾。

「感情の教育」と「小引」の中で述べられる五来の小説観、その中で使用される「高潔」「纖麗純潔」「清新高雅」の言葉は、文壇と教育界からの家庭小説待望論や、道徳の守り手としての「家庭」にふさわしい「家庭小説」が求められたことと重なる。五来の考えでは、自分の翻訳した『未

だ見ぬ親』こそが当時の文学界に必要とされた「高潔なる著作」なのであり、読者の教育、さらには社会の教育に貢献する理想的な「家庭小説」なのである。

それでは、『未だ見ぬ親』を通して読者の中に育まれるべき「高潔」な「感情」とは具体的に何であろうか。この点に関し、「感情の教育」の中では「高崇潤美なる情念」として「父子相愛の情」が挙げられている³³⁾。また、『未だ見ぬ親』の「小引」の中では何も述べられないが、昭和10年に同作品が再刊された際の「序」の中では、明治35年と昭和10年の社会が比較され、次のように述べられている。

文芸は欧州の自由主義のただれ切つた退廃文学に支配せられて古の健全な家族感情などは葉にしたくもなくなつて仕舞つた。つまり世は〔……〕感情生活が枯渇し、従て道德が低下して仕舞つたのである³⁴⁾。

引用によると、『未だ見ぬ親』によって教育しうる「感情」とは「健全な家族感情」であり、それが存在しなくなった昭和10年の社会の「道德が低下」してしまつたと嘆かれている。この五来への回想と「感情の教育」の記述を合わせて考えれば、『家庭小説 未だ見ぬ親』の中で説かれた道德とは、「家庭」の中で育まれるべき「健全な家族感情」であり、中でも「父子相愛の情」を中心とした親子道德であると言えるのではないだろうか。

2-2. 親子道德を説く物語としての『未だ見ぬ親』

『未だ見ぬ親』の中で「健全な家族感情」に基づく家族の道德が説かれ、その中でも親子道德が中心的に説かれると考えられるのは、さらに二点の理由がある。第一に翻訳が行われた当時の五来は、家族を個人と国家の結節点として重視し、個人の幸福と国家の発達の両方が家族に左右されると考えているからである。第二に『未だ見ぬ親』は原作の全44章の中の27章が翻訳の対象とされた翻案であるが、原作の中で主人公と他の登

場人物との「親子」としての関わりを中心に翻訳が行われるからである。

翻訳が行われたときに五来が家族のあり方を重視したことは、五来が『法学志林』上で明治34年に発表した論文「家族制度ト個人制度トノ得失」から明らかとなる³⁵⁾。五来はここで、「人間はポリスの動物である」というアリストテレスの哲学原理に基づき、家族は「人類社会的関係ノ第一歩」であり、かつ「国民社会的団結ノ単位」であると述べ、「国家ノ発達、生存モ個人ノ安寧幸福モ」家族に源泉をもつと説明する。そしてその上で、「個人ノ価値ヲ軽視」する従来の「厳格ナル家長専制長子相続ノ家族制度」は批判され、「欧米ノ社会組織」の「個人制度」に基づく家族の「輸入」が望まれる。具体的には「家族制度」の欠点が九点挙げられる。つまり、家父長による家族成員の人権侵害、個人の独立心の欠如、職業の世襲による階級制の助長、男尊女卑、蓄妾の弊習、養子婚姻の不幸、親の過干渉による円満な婚姻の不成立、親類への強い愛着心による若者の海外進出の妨害、公德思想の欠如の九点である。五来は当時の日本を「家族制度」から「個人制度」への「過渡ノ時代」にあると捉え、後者が将来「必ズ勝利」とすると述べる。この論文で示された「個人制度」に基づく家族とは、自立した個人と夫婦関係を基礎として成立するとされる点から、また、個人の幸福の源泉であると同時に国家の基礎となると考えられた点から、本稿2-1で言及した「家庭」と重なる。特に、親の子に対する支配と過干渉、親子の依存関係は批判され、子を含む家族成員の「独立自主ノ精神」「独立独行ノ生活」は「社会真正ノ進歩」のために重要であると強調される³⁶⁾。

Sans Famille と『未だ見ぬ親』のそれぞれの作品の章の構成を比較すると、『未だ見ぬ親』は、主人公とその親、または親代わりとの関係に焦点が当てられ翻訳されたと考えられる。五来は、原作が長大な小説であるため、「其全体の趣旨に関係なき出来事」は「省略」したと述べる³⁷⁾。*Sans Famille* は第一巻が21章、第二巻が23章で構成され、『未だ見ぬ親』の翻訳において全て「省略」された章は、第一巻の第9章、第二巻の第2章か

ら第7章、第12章から第21章の合計17章である。この「省略」からは、次の二点が指摘できる。

第一に「親子」の話が重点的に翻訳された点である。養父母、実母、「真の父も及ぶまい」(76頁)と思われる師匠など、主人公と他の登場人物との「親子」の旅物語である第一巻と、親友とともに旅をする子どもだけの旅物語である第二巻とでは、前者に重点を置き翻訳されたと言える。第二巻も、主人公と養母、実母との再会の場面を中心に翻訳され、「親子」の話に重点が置かれる。また、原作の社会小説的な要素も大幅に削減される。フランス児童文学史上において、原作は社会小説の要素を持つ児童文学作品の源流と評価され、特に第二巻の第2章から第7章における炭鉱の場面は、ルイ・シモナンの『地下の生活、あるいは炭鉱と炭鉱夫』(1867年)を主要資料として、エクトール・マロが力を入れて執筆した部分である³⁸⁾。『未だ見ぬ親』では炭鉱の場面が全て「省略」され、主人公が「未見の親を尋ねて天下を流浪する」³⁹⁾筋に焦点を絞って翻訳がなされる。

第二に、親子道徳を説く物語として不適切な部分は「省略」されたと考えられる点である。第二巻第12章から第21章までは、主人公が、主人公の生家を装う偽の家族と、親子間の確執、家父長である父への反発の中で生活し、その生活から脱出するという筋が展開される。親子不和、親の子に対する支配は五来が理想とする親子のあり方に反し、そのために「省略」されたのではないかと考えられる。

五来は、原作の *Sans Famille* 中の「親子」の話に焦点を当て、さらに親子道徳を説くためにふさわしい部分を選択して翻訳したと考えられる。本節で検討した五来の論文「家族制度と個人制度との得失」に表された、各々の「独立」の上に成立する親子関係の主張と、理想的な「親子」の話に重点が置かれた翻訳とを合わせて考えると、原作に翻訳する価値のあるものとして見出されたのは、これからの日本の「家庭」が基準とすべき個人主義に基づく親子関係であると言えるのではないだろうか。この点を、次章で具体的に検討する。

3. 原作に見出された個人主義に基づく親子関係

3-1. 個人主義に基づく教育

Sans Famille に見出された、個人主義に基づく親子関係は、まずは教育面にあると考えられる。『未だ見ぬ親』の「小引」では、原作について次のように述べられる。

この書に顕はれたる著者の精神を求むれば、全く是れ精神教育、人格の継承を描くを以て其主眼としたるものの如し、故に一見唯是れ犬猿踏舞の幼稚なる戯文字を連ねしが如くなりとも、其裏面に於て凜乎たる気魄の隠約の間に認められずんばならず⁴⁰⁾

引用中の「精神教育、人格の継承」とは、主人公の太一（原作ではレミ）が、犬と猿とともに興行する旅芸人の嵐一斎（原作ではヴィタリス）から受ける教育を指し示すと考えられる。両者は師弟関係にあり実の親子ではないが、『未だ見ぬ親』では、捨て子の太一の「真実の父母の慈悲と云ふては本より心に覚えなけれど、[……] 嵐一斎殿の親切は、真の父にも及ぶまい」(76頁)という原文には存在しない述懐が加筆され、嵐一斎を太一の父親に見立てる姿勢は原作より強く表れる。この「親子」の教育を五来は「人格の継承」とであると述べ、個人の「人格」を認める個人主義に基づく教育を、原作に見出したと考えられる。

原作の *Sans Famille* においてヴィタリスからレミに授けられる教育には、教育内容と教育方法の両方に特徴がある。まず教育内容について具体的に述べると、ヴィタリスは読み書き計算、地理、歴史の教授によりレミの知力を養い、旅の戸外生活の中で体力をつけさせ、音楽の教授と旅芸人としての実際の労働によって職業教育を行う。さらに「人生は大抵の場合が闘いだ」⁴¹⁾という教訓のように、忍耐強く生きる姿勢が説かれる。このように、原作の教育内容には知育、体育、職業教育、道徳教育が包含される。次に教育方法の面では、レミ自身の五感と身近な生活体験に依拠する方法

が取られる。具体的には、板に彫った文字の形を理解させることから始まる読み書き教育、フランスを旅して歩くことで行われる地理教育、演技や興行の仕方を実際の労働の中で学ぶ職業教育などが挙げられる。原作で提示されるこのような教育では、児童自身の力を尊重して自立を促し、知育、体育、職業教育、道德教育の調和の上に人格を陶冶することが目指される。つまり、児童の人格形成に重点を置いた個人主義に基づく教育なのである⁴²⁾。

五来は『読売新聞』紙上で明治35年11月1日から14日まで連載した論説「教育界の覚醒——個人主義の主張」において⁴³⁾、個人主義に基づく教育の必要性を主張するが、原作に提示される教育に対する五来理解の度合いを示す資料として、この論説は重要である。この中で五来は、フランスの社会学者エドモン・ドモラン(Edmond Demolins, 1852-1907)の主著『アングロ・サクソンの優秀性は何に起因するか』(1896年)の記述に基づき、イギリスの家庭教育と学校教育が日本にも導入されるべきであると主張する⁴⁴⁾。家庭教育については精神教育、手芸教育、体力の養成に分けて述べられる。子を一人の大人として扱い、自分のことは自分でさせて「『生活ハ戦争』なりといふ事⁴⁵⁾」を教える精神教育、「労働の尊ぶべき事」を教え、子が「他人に依頼せずに生活して行き得る」ように訓練する手芸教育、「如何なる境遇に陥つても、之に耐え」られるように体を鍛える体力の養成の三点が主張され、親が子の精神力、生活能力、体力を養い、子が「理想的の独立自主の人」となることを目標とする。学校教育については、セシル・レディー(Cecil Reddie, 1858-1932)が1889年にアボッツホルムに創設した寄宿学校の教育課程が紹介される。レディーは人間の心身の諸能力の調和的発達に基づいた人格の陶冶を教育の目標とした教育者である⁴⁶⁾。五来は、アボッツホルムの学校では、知力だけでなく、「精力、意力、体力、手芸、活動力」の調和的発達の上に「人間を作る」ことが目的とされると述べ、実物教育に基づく知育、体育、手芸、芸術、社交により構成された教育課程が「完全なる人間」を作ると述べる⁴⁷⁾。

この論説の中で五来が賞賛する教育は、知力、精神力、生活能力、体力など人間の諸能力の発達の調和の上に成立する点、教育が実物教育に基づく点、最終目標が個人の人格の陶冶にある点の三点において原作者エクトール・マロが *Sans Famille* の中で提示した教育と類似する。原作に提示された個人主義に基づく教育の特徴を五来は理解し、その価値を認めた上で、作品を日本に翻訳紹介したと考えられる。特に、先に言及した旅芸人の嵐一斎から太一への教育では、太一は実物教育に基づいてバランスよく諸能力を発達させることができる。その上、その論しの中には「人間の一生は戦争だ」(55頁)という「『生活ハ戦争』なりといふ事」をまさに教える言葉もあり⁴⁸⁾、精神教育の面でも五来の理想に近い。この嵐一斎という「親」から太一という「子」への教育を、五来は個人主義に基づく教育として模範となりうると見なし、翻訳を通して紹介しようとしたと考えられる。

子どもを個人として認め、その人格陶冶を目的とする個人主義的教育論は明治初年以來存在し、その代表例として福沢諭吉や植木枝盛、小崎弘道などが子どもの権利の自覚に立脚した親子関係を説いたことが挙げられる⁴⁹⁾。明治20年代後半以降に隆盛した家庭教育論の中では、次世代の国民形成の基礎としての家庭教育が注目され、「家庭」の中で一人ひとりの子どもが未来の国家の礎として育つことが期待された⁵⁰⁾。五来教育観を示す「教育界の覚醒——個人主義の主張」においても、「国家の富強ハ人民各個人の富強の集合に外ならず」と述べられ、五来もまた個人の教育の先に国家の発展を見る。五来はさらに、個人主義に「家族主義」を対置させ、日本の従来の「家族主義」を「唯家を重んずることを知つて、人を重んずることを知らず」と個人の価値を認めない点で批判すると同時に、家族主義は子の「独立心」に対して無頓着で日本人を「大国民たらしむる」ことができないと、国民形成の弊害となる点からも批判する⁵¹⁾。『未だ見ぬ親』で示された親から子への教育は子の人格を形成する理想的な家庭教育であり、子に「凜乎たる気魄」を教え日本人が「大国民」となるのに貢献するという展望が五来

の視野にあったのではないかと考えられる。

3-2. 親子間の情愛

原作に見出された個人主義に基づく親子関係のもう一つの面は、親子間の情愛にあったと考えられる。五来いつくの論文「家族制度ト個人制度トノ得失」において、「家族制度」における親の子に対する支配と過干渉が批判されていることは本稿第2章で言及したが、個人主義に基づく親子関係では、親は子に「圧制」⁵²⁾を敷くのではなく、その人格を尊重することが求められる。明治20年代以降の家庭論においても、欧米の家族をモデルとして、親子間には細やかな情愛が育まれることが理想とされ、家族成員の情緒的結合に基づく家庭内の「一家団欒」が追及すべき価値とされたが⁵³⁾、五来は論説「感情の教育」の中で「家庭の和楽」のような「人類の幸福と称せらるるものの常に感情の作用たる」ことを述べ、小説によって読者に教育すべき感情の一つとして「父子相愛の情」を挙げる⁵⁴⁾。

八年間太一を育てた養母、旅の途中で出会い結末で親子として再会する実母、太一が「心から懐いて仕舞つて」(76頁)いた嵐一斎、これらの登場人物と太一との親子としての情愛に満ちた関わりは五来によって評価されたばかりでなく、『未だ見ぬ親』の書評においても「人情の美はしき光」⁵⁵⁾として受け取られ、『未だ見ぬ親』は「家庭小説の上乗」⁵⁶⁾と評価される。五来は *Sans Famille* に表れる親子間の情愛を、翻訳によって伝えるだけでなく、自ら加筆して改変を加え、強調している。たとえば以下の部分である。

C'est là une erreur fâcheuse : on obtient peu de chose par la brutalité. [...] Si je les [=les bêtes] avais battues, elles seraient craintives, et la crainte paralyse l'intelligence. (D, I, p. 73 ; Ch, I, p. 70)

それは困った間違いなのだ、(動物を)乱暴にあつかってもほとんど得をしない。[……]もし私が動物をぶったりすれば、動物はおびえて頭が働かなくなる。(拙訳)

雖然人を訓練^{しつけ}するのに怒ると云ふのは間違で、犬を打つたり叱つたりすれば、怖けて仕舞つて却て芸が出来なくなる位が関の山だ、それは子供を成長^{そだ}てるにも同じ事で、厳しい家庭よりは、矢張愛情で成長^{ひね}てる家庭の方が却て子供は言ふ事をきいて、歪^{ただ}くれずに成長つと云ふもんだ、唯其愛に溺れない丈が肝腎な所だ (68頁、下線は論者による)

引用の下線部が五来によって改変された部分である。原文では、ヴィタリスがレミに一座の動物に芸を教える際の注意について説く場面であるのに対し、翻訳文の嵐一斎の言葉においては、暴力の禁止は動物の扱いだけでなく「人を訓練る」ことにも当てはめられ、原文には存在しない文が加筆されて、「家庭」において親が子を「愛情で成長てる」ことの必要が説かれている。

五来が翻訳に際して改変を加え、親が子に接する際の「愛情」が強調されている例はほかにもあり、その一つが原作の第一巻第10章、翻訳の「其の二十二」において⁵⁷⁾、嵐一斎との旅の日常生活を太一が回想する場面である。その回想の中で、嵐一斎が太一に行ったこととして、原文では寒い日に同じ毛布にくるまったこと、暑い日に荷物を担ぐのを手伝ってくれたこと、食事の時においしいところもまずいところも平等に分けてくれたことの三つが語られるのに対し、翻訳文ではそれらに加え「寒い空には着物も脱いで貸して呉れた」(90頁)ことが加筆される。また、同じ場面での、耳をひっぱる、ひっぱたくなどの体罰についての回想に関しては、翻訳文では「日頃善く聞く小言」(90頁)に改変される。そしてさらに「如何に余を可愛がつて下すつたらう、如何に余を面倒見て下すつたらう」(89-90頁)と太一が嵐一斎を懐かしむ言葉が加筆される。この場面では、嵐一斎が太一へ行った「親切」が加えられ、体罰についての表現も和らげられる配慮が見られる。そして「子」の太一の側から「親」の嵐一斎を慕う感情も加筆によって強調される。

このように『未だ見ぬ親』では、原作で登場人物のやり取りの中に表れる親子間の情愛が、そのまま翻訳され紹介されるばかりではなく、時に改

変や加筆が加えられながら、それを強調するように翻訳された。『未だ見ぬ親』には、親が子に愛情をもって接し、子も親を慕う「父子相愛の情」が表れており、「家庭」における親子間の情愛が重視され、作品を通して読者に伝えられようとしたことが理解できるのではないだろうか。

本章で論じてきた、個人主義に基づく教育、親子間の情愛は、フランスの小説 *Sans Famille* に五来が見出した、「欧米ノ社会組織」の「個人制度」に基づく親子のあり方である。しかし、五来が『未だ見ぬ親』を通して読者に教えようとした親子道徳はそれだけではない。*Sans Famille* から『未だ見ぬ親』への翻訳には、原作に表れた個人主義的な親子関係を紹介するのに加え、親子道徳の日本化も見受けられるのである。

4. 作品の日本化 —— 報恩の観念の付加

4-1. 親の恩を感じる主人公

『未だ見ぬ親』には、五来が日本の親子道徳の特徴と見なす観念が付加されている⁵⁸⁾。それは子から親への報恩の観念である。『未だ見ぬ親』の中に表れる報恩の観念に関し、そのほとんどは、原文を翻訳する際に五来の改変と加筆によって付加された。つまり、主人公の太一が「親」たちの恩を感じ、その恩に報いようとする姿が五来の改変と加筆によって表されるのである。五来がこのような改変を加えた箇所は『未だ見ぬ親』の中で六箇所にわたる⁵⁹⁾。次に挙げられる例は、太一が養母のお文（原文ではバルブラン母さん）との再会のために何か贈り物を買っておこうと考える場面である。

Aller chez mère Barberin pour l'embrasser c'était m'acquitter de ma dette de reconnaissance envers elle, mais c'était m'en acquitter bien petitement et à trop bon marché. Si je lui portais quelque chose. Maintenant que j'étais riche, je lui devais un cadeau. [Quel cadeau lui faire?]

(D, II, p. 28 ; Ch, II, p. 29. ただし[]内の文は Charpentier 版には欠ける。)

バルブラン母さんの家に、母さんにキスをし

に行くのは、母さんへの恩返しのためだけに、キスだけではほんの少しくなってしまうし、安上がりすぎる。何か母さんにお土産を持っていこうか。今僕はお金持ちだから、母さんに贈り物をしなくては。[どんな贈り物がいいだろう?](拙訳)

まこと八年の養育の恩、^{うみ}生の親も及ばぬ其愛情、中々詞には述べ尽されぬ位で、今でも目に付いて忘れられぬは、後面の坂道から見下した時に、^{きちがひ}狂乱見た様になつて、家の周囲を余を尋ね廻られた母様の姿である、思へば四年の永の月日も、子を思ふ親の心の何程迄に、^{あけくれ}旦暮案じて居られたやら、今日の旅路は其母様の心を安んじ参らせて、無事で成長つた昔の太一を、一目なりと御眼に掛けて、喜ぶ顔を見たいからの事ではあれど、尚其上に心ばかりの贈物を持ち行きて、^{どう}如何か母様を喜ばせ、^{せど}せめて海山の恩の万分の一なりと報い奉る事の出来たなら⁶⁰⁾、自分に取つては此上の喜びなく、亦左様なくてはならぬ筈と、^{その}早くも心に決めたのである、それにしても、^{おみやげ}其贈物は何にしたものであらう(263-64 頁、下線は論者による)

下線部が五来による加筆である。この場面では、原文の中に「母さんへの恩返し«m'acquitter de ma dette de reconnaissance envers elle»」という一節が存在するが、翻訳文にはさらに五来によって親の恩についての文章が加筆される。つまり、翻訳文では、太一が感じている恩の内容が「養育の恩」と「生の親にも及ばぬ其愛情」の恩であることが具体的に言われ、太一がお文の元を去ったときの「母様の姿」とその後の「子を思ふ親の心」に思いが馳せられる。さらに再会によって「母様の心を安んじ参らせ」る目的が付加され、養母への贈り物を思いつく理由についても、金銭的な余裕には言及されず、「せめて海山の恩の万分の一なりと報い奉る」ためであると、改変が加えられる。

このような加筆と改変によって、五来は報恩の観念を親子道徳として物語に付加したと言える。五来は報恩の観念について、読者に教えるべき道

徳としてこれを意識していた。『未だ見ぬ親』に植村恵子、環姉妹宛ての献辞が付されることは本稿第1章で言及したが、献辞の中では「貴嬢方あなたが此本を読んで〔……〕少しでもお父様母様の御恩を知ることが出来たなら、それこそ此上ない私の幸福です」と述べられる⁶¹⁾。『未だ見ぬ親』の読者として「一方に於ては年少の読者を求めんと欲し」⁶²⁾た五来は、主人公が「親」たちの恩を感じ、その恩に報いる姿を、作品の中で示すことで、読者に親の恩を教えようとしたと考えられる。

4-2. 五来素川の「報恩」観

『未だ見ぬ親』に付加された報恩の観念について、五来はどのように考えていたのであろうか。第3章で論じた個人主義に基づく親子関係と、親子道徳としての報恩の観念との間に矛盾はないのであろうか。

報恩の観念は、日本の封建的道德思想に基づく親子関係の基本となるものとして捉えられる。たとえば姫岡勤は、江戸時代の儒教に基づいた親子道徳においては、親に対する子の絶対的服従が説かれ、報恩に孝道の理論的根拠が求められたと述べる⁶³⁾。また川島武宣は、日本において親に対する恭順・服従の義務を説く「孝」を言う場合には、「恩」に条件づけられるという論理的かつ心理的構造を含み、明治20年代以後の修身教育の中でも報恩の観念が重要視されたと述べる⁶⁴⁾。

五来もまた、報恩の観念を日本の親子道徳の主要な特徴と考えている。管見の限りでは、五来が報恩の観念について直接言及した記述は少ない。しかしその中でも、『未だ見ぬ親』の翻訳と比較的近い時期に言及されたのが、大正3年に発表された『大帝那翁』においてである。この作品は五来によるナポレオンの伝記であるが、その生い立ちを説明する記述の中で、ナポレオンの生地であるコルシカ島を「地中海上の日本」とし、その環境が「甚だしく我が日本のそれに類似し」ていると述べられる。さらに「最も我國民との不可思議なる符合は其家族生活の情態なり」と述べられた上で、ナポレオンという「偉人の人格中報恩の観念大に、孝心甚だ深く、弟妹を思ふあひにの情甚だ切なるを発見する」のは「日本の社会と相似」ている

「家族主義のコルシカ島」の中で生まれ育ったからであるとされる⁶⁵⁾。この『大帝那翁』の記述からは、五来が報恩の観念を、「家族主義」の日本の社会の中で培われる道徳の主要な特徴であると認識していたことが理解できる。

しかしここで疑問が湧く。本稿第2章、第3章で参照した論文「家族制度ト個人制度トノ得失」、論説「教育界の覚醒——個人主義の主張」の中で五来は「家族制度」「家族主義」の欠点を挙げ、個人主義が将来において「必ズ勝利」として述べていたのにもかかわらず、家族主義の特徴である報恩の観念を、なぜ『未だ見ぬ親』に付加したのであろうか。

この疑問について、まずは、五来が明治30年代の日本の社会を、家族制度・家族主義から個人制度・個人主義への「過渡ノ時代」にあると理解し、「個人主義ノ道徳」だけで当時の日本の「社会ノ風教ヲ維持」しうるのであるのか疑っていた、という点に言及せねばならない⁶⁶⁾。

明治32年に雑誌『社会』に発表した論文の中で、五来は「維新の政治革命は全く根本的に我が東洋文明の旧社会を打破し、新社会未だ混沌として、〔……〕社界〔ママ〕に一定の思想なく、一定の道徳なく、一定の宗教なく、〔……〕故を以て社界〔ママ〕に制裁なるものなく、亦一定の秩序なるものなし」⁶⁷⁾と述べ、日本の社会に「一定の道徳」がないことを指摘しているが、当時の五来には、日本の社会の道徳的基盤は何か、迷いがあったと思われる。その迷いは論文「家族制度ト個人制度トノ得失」において、「個人主義ノ道徳」への懐疑となって表れる。つまり、個人主義は日本に「輸入」すべきであると認識されながらも、それが利己主義に陥る可能性が危惧されるのである。五来によると、個々の人間の「独立自尊」を目標とする個人主義は、人間を自己中心的にし、その結果陥る利己主義は「弱肉強食社会ヲ挙げテ修羅ノ巷ト化」させる「文明ノ腐敗力」であり、個人主義の「最モ恐ルベキ弊害」である。そして欧米の社会では、キリスト教が博愛と献身犠牲を教えて「僅ニ其社会ノ風教ヲ維持」しているが、それが当時の日本の社会の道徳的基盤となるかどうかは論文の中では言及されず、「理想的個人主義ノ完

全ナル輸入ハ、実ニ社会ノ思想モ慣習モ道德モ変遷シタル後タラズンバアラザルナリ」と論文は締めくくられる⁶⁸⁾。

その一方で、同論文で九つの欠点を挙げられた家族制度は、道德面では評価される一面もある。五来は家族制度について「道德ニ於テハ、子ハ父ニ孝ニ弟ハ兄ニ順ニ婦ハ夫ニ従フ、其社会的精神トシテハ、身ヲ以テ他ニ奉スルノ犠牲的観念最モ見ルベキモノアリ」と述べ、それが「東洋道德ノ美」であると言う⁶⁹⁾。

個人主義が利己主義に陥ることに対する五来の危惧を考えると、『未だ見ぬ親』の中で個人主義に基づく親子関係が紹介されながらも、報恩の観念が付加されたのは、家族主義の道德における「身ヲ以テ他ニ奉スルノ犠牲的観念」が、個人主義が利己主義へと陥るのを防ぐと期待されたからではないだろうか。家族主義から個人主義への過渡期にある日本の社会の道德的基盤に対して迷いがあった五来は、個人主義が個人の人格を尊重し、一人ひとりの人間の「独立自尊」を目指す点を大きく評価する一方で、人間を自己中心的にさせるという欠点を補うものとして、家族主義の道德の基礎である報恩の観念を強調し、日本の社会にふさわしい親子道德を作品に含ませたと考えられる。『未だ見ぬ親』の主人公の太一は、「親」の教育によって人格を形成し、「親」たちから愛情を受ける一方で、自らも「親」のために尽くし、行動することを忘れない「子」として表されるのである。

『未だ見ぬ親』における報恩の観念と個人主義に基づく親子関係とは矛盾しない。なぜなら、報恩の観念が付加されるのは、すべて太一による語りの場面においてであり、太一の報恩は、太一自身の意志と「親」に対する「懐^{ゆめ}しさの思ひ」(184頁)に基づくからである。この点において、先に参照した姫岡勤や川島武則の論文の中で言及される、親に対する絶対的服従、恭順の義務の根拠となる報恩と、『未だ見ぬ親』の太一の報恩は異なる。つまり『未だ見ぬ親』の親子のあり方として、基本とされたのは個人主義に基づく親子関係であり、その上で子が親子関係の中で自己中心的とならないように、個人主義の欠点を補う道德として、子自身の意志と親子間の情愛に基づく報恩の観念

が付加されたと考えられる。

結 論

五来素川は、『未だ見ぬ親』に「家庭小説」という角書を付すことで、道德を含んだ小説とし、読者を教化しようとした。「家庭小説」という枠の中で、『未だ見ぬ親』を通して五来が読者に教育しようとしたのは、「家庭」にふさわしい「健全な家族感情」であり「父子相愛の情」であった。当時の日本の社会を家族主義から個人主義への過渡期にあると理解していた五来が、『未だ見ぬ親』にこめた道德とは、これからの日本の「家庭」の中で基準とされるべき家族の道德であり、とくに親子道德であったと考えられる。

五来は家族を個人の集合であり、かつ国家の基礎として考えている。家族は自立した個々の家族成員のもとに成立するべきであるとされ、個人主義に基づいた家族が理想とされる。親子道德を説く物語として『未だ見ぬ親』をとらえると、原作の *Sans Famille* に見出された価値は、個人主義に基づく親子関係であったと言える。親子間の情愛と、親が子を一人の人間として認め、子の人格形成に注意が払われる教育とは、「家庭」の中であるべき感情と教育として評価されたと考えられる。個人の「独立自尊」を目指す個人主義へと日本の社会が移行することは、「国家の富強ハ人民各個人の富強の集合に外ならず」と考えた五来にとって、国家の発展のためにも必須であった。『未だ見ぬ親』という「家庭小説」も、国家の基礎である「家庭」に個人主義を浸透させる手段とみなされた一面があるのではないだろうか。

しかし、その一方で個人主義の道德の面に関しては懐疑もはさまれ、個人主義が人間を自己中心的にし、利己主義へと陥ることが危惧された。*Sans Famille* から『未だ見ぬ親』へ翻訳される際に付加された子から親への報恩の観念は、その欠点を補うものとして期待されたと考えられる。しかし、この報恩の観念も、子自身の意志と親子間の情愛に基づき、個人主義と矛盾するものではない。家族主義から個人主義への過渡期にあると見なされた日本の「家庭」にふさわしい親子道德が、

『未だ見ぬ親』には含まれたと考えられる。

本稿は平成 22 年度 文部科学省科学研究費補助金・特別研究員奨励費（課題番号 22・2796）による研究成果の一部である。

註

本稿では初版の『未だ見ぬ親』を底本として使用し、小説本文の引用の際は、引用文末尾に、算用数字による頁数のみを括弧付で記す。五来素川訳『家庭小説未だ見ぬ親』、東文館、明治 36 年 7 月 5 日（日本近代文学館所蔵）。

引用する *Sans Famille* の原文テキストは、以下の①②を使用し、引用の際は括弧内に示す略号とローマ数字による巻数、算用数字による頁数を、引用文末尾に括弧付で記す。① Dentu 版：Hector Malot, *Sans Famille*, tome premier et tome second, Paris, E. Dentu, sixième édition, 1879 (D). ② Charpentier 版：Hector Malot, *Sans Famille*, tome premier et tome second, Paris, Charpentier, Cent douzième mille, 1893 (Ch).

引用内の旧字体は、新字体に統一した。

- 1) 『読売新聞』連載中の作品名は「家庭小説 まだ見ぬ親」と表記され、単行本版の表記は『家庭小説 未だ見ぬ親』である。本研究では底本に単行本版を使用したため、本稿の題名及び本文中で作品を示す際には『未だ見ぬ親』の表記で統一する。
- 2) 『読売新聞』連載の「まだ見ぬ親」と単行本版の『未だ見ぬ親』の本文について、ほとんど異同はないが、ただし、前者の地の文の中で用いられる「です・ます」調の文章は、後者では「である」調に書き改められている。
- 3) 『児童文学翻訳作品総覧』第 3 巻（大空社、2006 年、253 頁）によると、明治 36 年 7 月に警醒社から『家庭小説 未だ見ぬ親』の並製版が出版され、東文館から特製版が出版された。実際に日本近代文学館に東文館版の初版（明治 36 年 7 月 5 日）が所蔵され、東京神学大学所蔵の警醒社版第 6 版（明治 42 年 2 月 15 日）は初版が「明治三十六年七月五日発行」とある。また国文学研究資料館が所蔵する福音新報社刊行の第 4 版（明治 37 年 2 月 20 日）の奥付にも初版が「明治三十六年七月五日発行」と記されている。
- 4) 佐藤宗子『「家なき子」の旅』、平凡社、1987 年、327-36、347 頁。佐藤宗子「物語の精錬過程——池田宜政の『家なき子』二再話」『千葉大学教育学部研究紀要』第 42 巻、第 1 部、1994 年、334 頁。
- 5) 沖野岩三郎著、日本児童文化史研究会編『明治キリスト教児童文学史』、久山社、1995 年、61-62、76 頁。
- 6) 鳥越信「家庭小説について」『学校図書館』123 号、1961 年、55-56 頁。
- 7) 飯田祐子「境界としての女性読者——『読まない読者』から『読めない読者』へ」『彼らの物語

——日本近代文学とジェンダー』名古屋大学出版会、1998 年、33 頁。日夏耿之介「家庭文学の変遷及価値」『日夏耿之介全集』第 4 巻、河出書房新社、1976 年、348-57 頁。

- 8) 『第一高等学校一覧 自明治二十五年至明治二十六年』、1893 年、150 頁。
- 9) 五来素川「欧山亜水録」『読売新聞』明治 37 年 10 月 7 日。東京英語学校生徒、五来欣造「巧みなる射撃」『少年園』第 5 巻 58 号、明治 24 年 3 月、25-27 頁。「欧山亜水録」で五来は自分の上京を「今より実に十四年前、余が十六歳の春なりき」と語っている。
- 10) 『第一高等学校本部一覧 自明治二十八年至明治二十九年』、1896 年、104 頁。
- 11) 『東京帝国大学一覧 從明治三十年至三十一年』、1897 年、360 頁。『東京帝国大学一覧 從明治三十四年至明治三十五年』、1901 年、507 頁。
- 12) 『福音新報』391 号（明治 35 年 12 月 25 日）などに個人事務所の広告が掲載されている。
- 13) 「社告」『読売新聞』明治 35 年 3 月 1 日。
- 14) 斬馬劍禪『東西両京の大学——東京帝大と京都帝大』、講談社学術文庫、1988 年、3 頁。
- 15) 佐波亘編『植村正久と其の時代』第 3 巻、教文館、1938 年、96-98 頁。同左、第 5 巻、教文館、1938 年、250-51 頁。
- 16) 岡野敏成編『読売新聞八十年史』、読売新聞社、1955 年、218 頁。『新聞人名辞典』、日本図書センター、1988 年、362 頁。
- 17) 五来素川「小引」『未だ見ぬ親』、東文館、初版、明治 36 年 7 月 5 日、2 頁。
- 18) 小沢奈々「東京帝国大学スイス人法学教師ルイ・アドルフ・ブリデル（1852-1913）の生涯——明治後期お雇い外国人研究序説」『法政政治学論究』、第 74 号、2007 年、165-74 頁。
- 19) 五来素川、前掲「小引」、1-2 頁。
- 20) Yves Pincet, «Bibliographie d'Hector Malot» in *Le Rocambole, Bulletin des Amis du Roman Populaire*, n° 7, Amiens, Encrage, 1999, pp. 111-130. Bibliothèque nationale de France, catalogue générale (<http://catalogue.bnf.fr/>). また本研究に使用した版は以下の通り。Hetzel 版：Hector Malot, *Sans Famille*, Paris, J. Hetzel et Cie., Bibliothèque d'éducation et de récréation, s. d. (vers 1890). Flammarion 版：Hector Malot, *Sans Famille*, nouvelle édition illustrée, tome premier et tome second, Paris, Ernest Flammarion, s. d. (vers 1900). 他の二版については註の冒頭を参照。
- 21) たとえば原文で«Arthur aurait joué avec un enfant trouvé, en aurait fait son camarade, son ami, presque son frère.» (D, I, p. 183 ; Ch, I, p. 184) という部分について、Hetzel 版にはその部分自体が存在せず、Flammarion 版では«presque son frère»の一節がない。翻訳文は「文雄さんも今迄其様なものと兄弟の様に仲良くして遊んで居たかと思へば」（133 頁）とある。
- 22) 瀬沼茂樹「家庭小説の展開」『明治家庭小説集』筑摩書房、1969 年、421 頁。

- 23) 加藤武雄「家庭小説研究」『日本文学講座』第14巻, 改造社, 1933年, 53-70頁.
- 24) 「家庭と文学」『帝国文学』2巻12号, 明治29年12月, 108頁.
- 25) 飯田祐子, 前掲論文, 37-43頁. 金子明雄「明治30年代の読者と小説——『社会小説』論争とその後」『東京大学新聞研究所紀要』41号, 1990年, 131-32頁.
- 26) 飯田祐子, 前掲論文, 45-46頁. 高橋一郎「明治期における『小説』イメージの転換——俗悪メディアから教育的メディアへ」『思想』812号, 1992年, 175-92頁. 牟田和恵『戦略としての家族』, 新曜社, 1996年, 167-68頁.
- 27) 新村出「家庭といふ語」『新村出全集』第四巻, 筑摩書房, 1971年, 125頁. 河北瑞穂「家庭小説の背景——明治二十年代前半期『女学雑誌』の周辺」『三重大学日本語学文学』2号, 1991年, 83-97頁. 小山静子『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房, 1999年, 29-30頁. 西川祐子『住まいと家族をめぐる物語』集英社新書, 集英社, 2004年, 76-77頁. 新村出は「家庭といふ語はその〔＝明治の(引用者註)〕二十年代からホームの訳語として辞書に現はれたものではなからうか」と述べた. 参考文献によると, 「ホーム(home)」の語はキリスト教の布教活動とともに伝播し, その新しい概念を最初期に論じたのは巖本善治「日本の家族——一家の団欒」(『女学雑誌』明治21年2-3月)であるとされる. 巖本は「ホーム」に「家族」「屋室」の語を対応させたが, その一方で植村正久は説教や評論でしばしば「家庭」の語を用いた. やがて一般的な訳語としては「家庭」が定着した.
- 28) 小山静子, 前掲『家庭の生成と女性の国民化』, 32-37頁. 牟田和恵, 前掲書, 61-62, 106-09, 168-70頁.
- 29) 牟田和恵, 前掲書, 160-68頁.
- 30) 五来素川「感情の教育」『読売新聞』明治35年9月13-14日.
- 31) 五来素川, 前掲「感情の教育」.
- 32) 五来素川, 前掲「小引」, 1-2頁.
- 33) 五来素川, 前掲「感情の教育」.
- 34) 五来素川「序」『まだ見ぬ親』平凡社, 昭和10年, 1-2頁.
- 35) 五来欣造「家族制度ト個人制度トノ得失」『法学志林』3巻21号, 明治34年7月, 43-56頁.
- 36) 五来欣造, 前掲「家族制度ト個人制度トノ得失」, 46, 55頁.
- 37) 五来素川, 前掲「小引」, 2頁.
- 38) Jean De Trigon, *Histoire de la littérature enfantine — de Ma Mère L'Oye au Roi Babar*, Librairie Hachette, 1950, pp. 122-126. Ida-Marie Frandon, *Autour de «Germinal» — La mine et les mineurs*, Genève, E. Droz, 1955, pp. 13-51.
- 39) 五来素川, 前掲「小引」, 1頁.
- 40) 五来素川, 前掲「小引」, 1-2頁.
- 41) 原文: «la vie est trop souvent une bataille.» (D., I, p. 56; Ch., I, p. 53.)
- 42) 原作で提示される教育については, 拙稿「エクトール・マロ『家なき子』『家なき娘』における児童教育」(『関西フランス語フランス文学』第16号, 2010年, 15-27頁)を参照.
- 43) 五来素川「教育界の覚醒——個人主義の主張」『読売新聞』明治35年11月1日-14日.
- 44) 五来は「仏国ヅムラン氏」の「『アングロー・サクソン人強大の原因』」の記述を元にしたと書く(五来素川, 前掲「教育界の覚醒」). 原書は以下を参照した. Edmond Demolins, *A quoi tient la supériorité des Anglo-Saxons?*, Paris, Librairie de Paris, s.d. ドモランは, アボッツホルムの学校を原書の第1冊第3章に紹介している.
- 45) この記述については, 註44に挙げたドモランの著作の第2冊第3章「アングロ・サクソンの教育はいかに生存競争への準備をするか」が参照されたと思われる. その中に「それ〔＝自主独立主義の教育(引用者註)〕は, イギリス人が, 次の二つの本質的な自主独立主義の表現によって定義するものである. 自助, そして生活のための戦争.」という一文がある. Cf. Edmond Demolins, *op.cit.*, p. 173.
- 46) 生井武久「アボッツホルムの学校」『岩波講座教育科学』第三冊, 1931年, 13頁.
- 47) 五来素川, 前掲「教育界の覚醒」.
- 48) 五来は, 人生や生活を戦争にたとえる表現を, ドモランの著作と *Sans Famille* の両者に見出したと考えられる. Cf. 註41, 註45.
- 49) 小林輝行『近代日本の家庭と教育』, 杉山書店, 1982年, 4-13頁. 論説「教育界の覚醒」からは, 五来が, 福沢諭吉にも影響されたことが分かる. 慶応義塾の教育は「自主独立の精神」を養う「個人主義的教育」と評価され, 「我国において早く之を唱導したものは故福沢翁である」と述べられた. (Cf. 五来素川, 前掲「教育界の覚醒」.)
- 50) 小山静子『子どもたちの近代』, 吉川弘文館, 2002年, 127-33頁.
- 51) 五来素川, 前掲「教育界の覚醒」.
- 52) 五来欣造, 前掲「家族制度ト個人制度トノ得失」, 47頁.
- 53) 小山静子, 前掲『家庭の生成と女性の国民化』, 34-35頁. 牟田和恵, 前掲書, 54-59頁.
- 54) 五来素川, 前掲「感情の教育」.
- 55) 白山生「家庭小説未だ見ぬ親」『帝国文学』9巻8号, 明治36年8月, 132頁.
- 56) 佐藤紅緑「まだ見ぬ親を読む」『福音新報』第421号, 明治36年7月23日.
- 57) 参照箇所は以下の通り. 原文: D, I, p. 121; Ch, I, pp. 121-122. 翻訳文: 89-90頁.
- 58) 五来の「報恩」観については本稿4-2を参照.
- 59) 六箇所とは『未だ見ぬ親』の76, 80, 132, 214-15, 217-18, 263-64頁. すべて太一による語りの場面で, 養母, 嵐一斎への「恩」を感じる太一の姿が看取される.
- 60) 近世の寺子屋で用いられた道徳教科書『童子教』には, 「父ノ恩ハ 山ヨリモ高ク 須弥山尚下シ 母ノ徳ハ 海ヨリモ深ク 滄溟海還テ浅シ」とあ

- る。また貝原益軒『大和俗訓』（1708 年刊）には父母の恩について「その恩、海よりふかく山より高し。〔……〕いかんしてか、その恩をむくひんや。たゞ孝を行ひて、その恩の万一を報ずべし。」とある。引用はこれらを踏まえた表現であると思われる。Cf.『童子教』（石川謙編『日本教科書大系 往来編』第 5 巻、講談社、1969 年所収、同書 172 頁。）、貝原益軒『大和俗訓』（益軒会編『益軒全集』第三巻、国書刊行会、1973 年所収、同書 129 頁。）
- 61) 五来素川による献辞は『未だ見ぬ親』の「小引」の前にある。頁数は付されていない。
 - 62) 五来素川、前掲「小引」、2 頁。
 - 63) 姫岡勤「封建道徳に表れたわが国近世の親子関係」『社会学評論』第 7 号、1952 年、126-28 頁。
 - 64) 川島武宜「イデオロギーとしての『孝』」『日本社会の家族的構成』、岩波現代文庫、2000 年、88-94 頁。
 - 65) 五来素川『大帝那翁』第一巻、養賢堂、大正 3 年、109-12 頁。
 - 66) 五来欣造、前掲「家族制度と個人制度との得失」、55-56 頁。
 - 67) 五来欣造「支那社会の特質」『社会』1 巻 1 号、明治 32 年 1 月、66 頁。
 - 68) 五来欣造、前掲「家族制度と個人制度との得失」、55-56 頁。引用内の読点は論者による。
 - 69) 五来欣造、前掲「家族制度と個人制度との得失」、45 頁。引用内の読点は論者による。

A Study of *Katei Shosetsu Mada Minu Oya* written by Hector Malot and translated by Sosen Gorai

Kimiko WATANABE

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto, 606-8501 Japan

Summary *Sans Famille* (1878), written by Hector Malot, is a popular work in French literature for children, and it was first translated and adapted in Japan by Sosen Gorai. This adaptation was entitled 'Mada Minu Oya' and it was published in 1903. Considering that this novel was categorized as a home novel (*Katei Shosetsu*), this article explores the question of 'what particular values were found in the original and which ones were added in the adaptation?' This article considers this question by comparing the original and the adaptation, and by considering Gorai's other writings.

Gorai tried to enlighten the readers through this didactic novel, and 'Mada Minu Oya' seems to contain information on family morals, particularly, moralities concerning parent-child relationships, that ought to be followed in Japanese 'homes'. The value of individualism in parent-child relationships can be found in the original, and particularly, mutual affection between parents and children and education aimed at building a child's character were appreciated by Gorai. On the other hand, the concept of gratitude, felt by the child toward the parent, was added in the adaptation, as Gorai considered it a fundamental principle of Japanese familism. According to him, Japanese society was in transition from familism to individualism, and therefore, family morals that were considered to be suitable for Japanese 'homes' at that time seem to be included in 'Mada Minu Oya'.